戰時保育所二ヶ月の雜感

留岡よし子

幼稚園といふ可愛い、なつかしい呼名に別れて、戰時保育所といふ標札の許に早、二ヶ月、あわたゞしいこの二ヶ月を振返つてみる。

四月五月、幼稚園であつた時も、六月七月、戰時保育所になつてからも、私の氣持、戰時下であるといふ緊張感、責任感に變りはない。毎日の保育の上に、防空の訓練の上に。

女學生の保育實習指導についても同じこと。たゞ、園兒と託兒には當然變化があつた。

まづ園兒二百名が、託兒百二十名になつた。保育所入所資格者である「保育條件の缺除又は不足せる家庭」の子供が、所屬町會長の證明付で定員百二十名集つた次第。

保育時間の八時始が七時始になり、四時退が七時退となつた。尤も、幼稚園の時も、必要に應じて四時過ても、預る事にはしてゐた。

日曜日廢止が變化の一つ、託兒の方には、三歳未滿が目下二名ゐる。これが變化の一つ、それから、おやつとして、味噌汁を與へることが出來る樣になつた。それが目立つ變化の一つ、それから幼稚園の時は、過去十四年間曾て一度、幼稚園視察といつて當局の責任者が來園された覺えがないが、戰時保育所となつて二ヶ月に滿たぬに、文部省、及東京都廳から、それ〴〵の責任者の方が數名來所されたのが目立つ出來事の一つ。(私の方は、女學校附設の保育所で、文部省と東京都教育課の監督下にある)

今、その變つたことを一つ〳〵追つてみる。

幼稚園の時だつてあの時間内、子供を預るといふ事丈で、つまり託兒の意味丈で十分家庭の手助けとなつてゐた事には間違ひはない。現今、有閑の主婦があらう筈もなし、複雜なこの頃の主婦の足手まとひになる子供を預る事に依つて、どんなにか主婦は能率を上げ結局、家庭は明らかに、ひいて直接生産、職務に當る主人の能率も悪くはなかつたに違ひない……が、やつぱり早朝、工場に行きがけに、子供を預けて、薄暮流れる汗を拭ひもあえずに、子供を受取りに來られるお母さんをみると、やつぱり、この仕事の仕甲斐を生々しく感じないではゐられない。

「主人が出征したのです。この子を預つて下されば明日からでも工場へゆきます。

滿員？　でもこちらは私の樣な者の子供を預つて下さる所なのでせう、今來ていらつしやる方は皆、私の樣な者許りでせうか」

つめ寄る顏付の眞劍さ、「どなたも證明のある方許りですが、缺席なさる方もありますから、ではお預りしませう」……といへる範圍、いはざるを得ない。

まだ二ヶ月で、はつきりした事は云へないが、かうして入所して來る子供の言葉、仕草をみてゐると、線の太さ、あら、たくましさを感じる一面、野卑、粗野を感じる、美點を失はずに、幼稚園の頃からのこゝの雰圍氣に早く、溶込んでほしいと思ふ。

「少し體を惡くして醫者に、ゆつくり寢る樣に……と申されましても、三人抱へてゐては寢んでは居られません、今日はおかげ樣で、朝から、只今まで、ぐつすり、寢ませて頂きました！」と、日曜日の夕方、出征遺家族のお母さんの嬉しさうなお迎へ。

「毎日御勞れでせうね、御主人からお便りありますか、お母さん御無理なさらない樣に！」無理なさらぬ樣といひ乍ら、せずに居られないのだ……と胸が迫る。涙さへ浮べて、一人を背負ひ、二人を左右に伴つて歸つてゆかれる後姿を見送つて、居殘り當番の若い保姆のホツとした微笑に打つかつて、「あなたも本當に御苦勞樣」とうれしい氣持になる。

保育所になつて以來、當番の保姆が、當番を終へた後、次々と仆れた。一人の保姆は神經衰弱の樣になつて寢つかれない……といふことで、心配した。これは必ずしも保育所になつたこと許りの原因でなく、折から、氣候も惡く、丁度四月以來の氣の勞れの出る時期であつたかも知れないが、新米の保育所主任の處置不當の難は免れない、保姆の人數と仕事の量、保育內容といふ點で考へさせられた。とにかく、保姆の緊張度は高い、高くて長いのだから。

「今日のお味噌汁は南瓜だ〳〵、南瓜をいしいね、南瓜甘いよ」はじめて、南瓜の實だつた時の、子供達の喜び樣を眺めて保姆一同啞然とした。

南瓜甘いね……そうだ、この頃甘いものといへば南瓜だ。嬉しそうな笑顏につられてほゝえんだ我々が、やがて、いぢらしさに泣けて來る……がこれも、つい昔を思ふ大人の感傷、大東亞戰下の子供達は、何の不平不滿もなく有がまゝを受入れて、强く育つて行くものを、「今日のお味噌汁の實はお姉さんと一緒に、女學校の畠へ行つて頂いて來たの」といふ日もある。頂いたといふだん草そのものは、そうよい味のものではないが、こゝでは特別のをいしさを覺えるらしい。

お晝寢から漸く覺めたカツチヤン、まだ眠さうな目をこすりこすり何やらぶつ〳〵つぶやいてゐるのをよく聞けば、

「ボクノオミオツケ、ボクノオミオツケ……」

たつた一杯のお味噌汁が、どんなに、子供達の心を、體を、養つてくれることか。

「どうですか、生產增强に役立つてゐますか。女學生の實習狀態は！」

と、御多忙な半日を割いて視察に見えた事に對して、まづ敬意と感謝を覺える。たとへ、お役人の方では、職務上當然の仕事の一つとして來られたとしても。「ほほう　やつてますね　女學生が！」

「はあもう、みんな樂しんで働いて居ります」「ある女學校の保育

所では、女學生が實習に來て、保姆の躾けたことをこわしてゆくから困る、といつてゐましたが……。」

「そういふ聲は、私も聞いて居ります、女學生が邪魔になる、來ない方がいゝといふのですが、つまり女學生を指導してゆく力がないといひますか年齢からいつても、女學生と、いくつも違はない、どうかすると同じ年なんていふ保姆さんには一寸、うつとうしい感じがするんでせう」

「なるほどかうしてくれとか、あゝしてはいけないとか云へない……。」

「そうです、一寸無理かも知れません。尤も何をいはなくても、保姆のする事を見てゐる丈でよい勉強になりますし、何より子供達の間で生活してゐれば子供達から敎へられる事が多いのですから、本當は、女學生といはず、母親になる筈の女の子が皆、一度は、實習をしなくてはならないものだと思ひます」

「そうですね、所でこちらではどんなにして居られますか」

「まづ、はじめは、何にもいはずに白紙のまゝ、豫備智識なしで二回見學して貰ひました。それからその二回の見學についての女學生の感想を聞き、保育所の保姆一同の女學生見學批評なるもの……主として種々の注意、を話して聞かせ、そこではじめて、今年から保育實習制度の出來た理由、何故に現下の貴重な時間を割いて、この制度が設けられたか、國家が女學生に何を要求してゐるかを話して確り覺悟を定めて貰ひ、今度は改めてその氣持で、數名づゝ交代に實習をはじめました。週一回一級づゝ保育に關する種々の講義、防空に關する處置、技術の習得、(歌、手技、童話遊戯等)をまづ以つて一通り致しました。そして又實習の批評をし、女學生は記錄を記して、私共の方へ提出し、それに對して批評する……といふ樣に只今の所やつて居ります」

「はあ、それは大變いゝやり方の樣ですね」

「まあ最初の試みではあり、殊に、今日にも空襲があれば、すぐに子供達を守らなければならない人達だと思ふと、この一年間の豫定を定めて、順を追ふてゐる暇がない樣に思はれ、まづ大體のみこんで貰ひ、まだ平穩であつたら、次にはもう少し深く……といふ樣に時局とにらみ合せて進めてゐる所でございます」

「子供達はなついてゐますか」

「もう、お姉さん〳〵といつて大喜びで居ります、茲に實習記錄がございますから、お讀み下さればお解りになりますが、まづ十人が十人、子供が好きでなかつた人も子供から好きにさせられてしまひます。」

「實習生は毎日代るのでせう。」

「はあ、交代になつて居ります、それで面白い事は、私共は毎日同じ人が實習に來るのなら、子供達も親しめるし、我々も慣れてくれゝば何かと都合がよいに……と考へるのですが、毎日代るといふことは大人の方で不便を感じる丈、子供達は、昨日のお姉さんも今日のお姉さんもないたゞ「お姉さん」として受入れて、顏の違ひは意に介さないらしいのです、服裝が同じ樣だからかも知れないと考へてます。

倉橋先生にこのお話をしましたら、先生も『それは面白い發見だ「制服のお姉さん」か、何でも、やつてみなくてはわからないもの

ですね、それはいゝことだ」と仰有つて居られました。」

お姉さんの實習記錄は實に面白い、また尊い、文部省の神馬氏は非常に興味を持たれて、あれを纏めてみたら面白い參考になるでせうといはれた。

戰時保育所として、生産增强の一面に挺身し、一方女學生の實習指導に當るこの仕事、二ケ月の雜感。

子を負ふて歸る母、疲勞に仆れる保姆、工場に行くより勞れるといふ女學生、そして、絶えず、あゝして、かうしてと只管に思ひにふける私自身、みんな〳〵「戰勝」の輝しい二字をみつめて、樂しく過してゐるのです。

（筆者は十文字高女附設戰時保育所主任）

東京都立第一高女戰時託兒所から

小山良子
赤沼陽子 記

一、受託幼兒　　定員五〇名

1、收容人員　　四歲より七歲まで

2、年齡　　一年保育　一五名
　　二年保育　二三名
　　三年保育　七名

3、受託條件

○時局重要産業從事者にして保育條件の缺除又は不足するもの。

○應召、應徵家庭にて保育條件の缺除又は不足するもの。

○保育責任者（家庭婦人）が勤勞に從事し、保育條件の缺除又は不足するもの。

右の幼兒にして所屬町會長より託兒を要する家庭なる事を證明せられたるもの。

應召家庭　二五パーセント
應徵家庭　一八パーセント
外に於て重要産業　二六パーセント
家庭に於て重要産業及び其の他家庭內職　二九パーセント
父死亡の爲母勤勞　二パーセント

4、保育料　月額四圓五十錢、但し規程に從ひ減免あり。

二、職員組織

所長　學校長

主任　一名